

鷓狩

泉鏡花作

一

初冬の夜更である。

片山津（加賀）の温泉宿、半月館弓野屋の二階

—— だけれど、広い階子段が途中で一段大きく

蜿つてS形に昇るので三階ぐらゐに高い —— 取

着の扉を開けて、一人旅の、三十ばかりの客が、寝

衣で薄ぼんやりと顯れた。

此の、半ば西洋づくりの構は、日本間が二室で、

四角な縁が、名にしおふ此處の名所、三湖の雄なる

柴山瀉を見晴しの露臺の詠ゆゑ、硝子戸と二重を隔

てゝは居るけれど、霜置く月の冷たさが、渺々たる

水面から、自から沁徹る。

いま偶と寐覺の枕を上げると、電燈は薄暗し、硝

子戸を貫いて、障子に其の水の影さへ映るばかりに

見えたので、

「おゝ、寒い。」

頸えりから寒さむく成なつて起おきて出でた。が、寝ねぬくもりの冷さめないうち、早はやく廁かはやへと思おもふ急せき心こころに、向むかう見みずに扉どあを押おした。

押おして出でると、不ふ意いに凄すこい音おとで匆はね返かへした。ドーンと扉ドアの閉しまるのが、廣ひろい旅りょく館わんのがらんとした大おほ天井てんじやうから地ちの底そこまで、以もつての外ほかに響ひびいたのである。

一つ、大おほきなもの音おとのしたあとは、目めの前まへの階はしご子こ段んも深ふかい穴あなのやうに見みえて、白しろい灯ひも霜しもを敷しいた状さまに床ゆかに寂さびしい。木もく目めの節ふしの、點ほつ々く黒くろいのも鼠ねずみの足あし跡あとかと思おもはれる。

まことに、此この大だい旅りょく館わんはがらんとして居ゐた。――
宵よひに受う持もちの女ぢよ中ちゆうに聞きくと、ひきつゞき二十か日あま餘あまりの間あひだ團だん體たい觀くわん光くわうの客きやくが立たてつて毎まい日にち百ひゃく人にん近ちかく込こみ合あつたさうである。其そ處こへ女ぢよ中ちゆうが漸やつと四にん人にんぐらゐだから、もし昨きの日ふにもおいでだと、どんなにお氣きの毒どくであつたか知しれない。すつかり潮しほのやうに引ひいたあとで、

今日は又不思議にお客が少く、此室に貴方と、離室の茶室をお好みで、御隠居様御夫婦のお泊りがあるばかり、よい處で、よい折から　ー　と言つた癖に・・・客が膳の上の猪口を一寸控へて、其はお前さんたち嘸疲れたらう、大掃除の後の骨休め、と言ふ處だ。此處は構はないで、湯にでも入つたら可からうと、湯治の客には妙にそぐはない世辭を言ふと、言に隨いて、では然うさして頂きます、後生ですわ、と膠もなく引退つた。疊も急に暗くなつて、客は胴震ひをしたあとを呆氣に取られた。

・・・思へば、それも便宜ない。

・・・さて下りる階子段は、一曲り曲る處で、一度ばつと明るく廣くなつたゞけに、下を覗くと尚ほ寂しい。壁も柱もまだ新しく、隙間とてもないのに、薄い霧のやうなものが、すつと這入つては、そつと爪尖を嘗めるので、變にスリツパが、迂りさうで、足許が覽束ない。

渠は壁に掴つた。

掌が其の壁の面に觸れると、遠くで湯の雫の音がした。

聞き澄すと、瀉の水の、汀の蘆間をひた／＼と音訪れる氣勢もする。・ ・ ・ 風は死んだのに、遠くなり、近くなり、汽車が逡するやうに、ゴーと響くのは海鳴である。

更に遠く来た旅を知りつゝ、沈むばかりに階段を下切つた。

何處にも座敷がない、あつても泊客のないことを知つた長廊下の、底冷のする板敷を、影の＝＝ふやうに、我ながら朦朧として辿ると・ ・ ・

「あゝ、此の音だつた。」

汀の蘆に波の寄ると思つたのが、近々と聞える處に、洗面所のおつたのを心着いた。

機械口が緩んだまゝで、水が點滴つて居るらしい。其の袖壁の折角から、何心なく中を覗くと、

「あッ。」と、思はず聲を立てゝ、ばた／＼と後へ退つた。

雪のやうな女が居て、姿見に眞蒼な顔が映つた。

温泉いでゆの宿やどの真ま夜よ中なかである。

客は、なまじ自分の他に、離室に老人夫婦ばかりと聞いたゞけに、廊下でいきなり、女の顔の白鷺に擦違つたやうに吃驚した。

が、雪のやうなのは、白い頸だ。・・・背後むきで、姿見に向つたのに相違ない。燈の消えた其の洗面所の圍が暗いから、肩も腰も見えなかつたのであらう、と、疑の幽霊を消しながら、矢張り悚然として立淀んだ。

洗面所の壁の其の柱へ、袖の陰が薄りと、立縞の縞目が映ると、片頬で白くさし覗いて、

「お手水・・・」

と、ものを忍んだやうに言つた。優しい柔かな聲が、思ひなしか、ちら／＼と雪の降りかゝるやうで、再び悚然として息を引く。

「どうぞ、此方へ。」

と言つた時は、もう怪しいものではなかつた。――紅鼻緒の草履に、白い爪さきも見えつゝ、

廊下を導いてくれるのであらう。小褌を取った手に、黒繻子の襟が緩い。胸が少しはだかつて、褌を引揚げたなりに亂れて、こぼれた淺葱が長く絡つた、ぼつとりものゝ中肉が、帯もないのに、嬌娜である。

「いや知つて居ます。」

これで安心して、衝と寄り状に、斜に向うへ離れる時、いま見たのは、此の女の魂だつたらう、と思ふほど、姿も艶に判然して、薄化粧した香さへ薫る。湯上りの湯のほひも可懐いまで、ほんのり人肌が、空に來て絡つた。

階段を這つた薄い霧も、此の女の氣を分けた幽な湯の煙であつたらうと、踏んだのは惜い氣がする。

「何だらう、こゝの女中とは思ふが、すばらしい中年増だ。」

手を洗つて、ガタン、トンと、土間穿の庭下駄を引摺る時、閉めて出た障子が廊下からすすと開いたので、客は最う一度ハツとした。

唯小とこがくれて、其その中年増ちうとしまが其處そこに立つ。

「これは憚りはげ……」

と、もう縞しまの小袖こそでをしゃんと端折はしを

「いゝえ。」つて、晝夜帯ちうやあびを引掛ひっかけに結むすんだが、紅あか

い扱帯しじきの何處どこか漆うるしの葉はのやうに、紅くれなゐにちらめくば

かり。もの靜しづかな、ひとがらな、おつとりした、顔かほも

下しもぶくれで、一重へまぶた瞼たぶの、すつと涼すずしいのが、ぼつと

湯ゆに染そまつて、眉まゆの優やさしい、容子ようすのいゝ女をんなで、色いろは

たゞ雪ゆきをあざむく。

「しかし、驚おどろきましたよ、まつたくの處ところ驚おどろきまし

たよ。」

と、懷中ふところに突つ込んで來きた、手巾ハンケチで手てを拭ふくの見み

て、

「あれ、貴方あなた……お手拭てぬぐひをと思おもひましたけ

れど、唯今たゞいまお湯ゆへ入はいりました、私わたしのだものですから。

「……それに濡ぬれては居をりますし……」

「それは……其奴そいつは是非ぜひはいしやく拝借せむせむしませう。貸か

して下さい。」

「でも、貴方あなた。」

「否いや、結構けつこう、是非ぜひねが願がひます。」

と、うつかりらしく手てに持もつた女をんなの濡手拭ぬれてぬぐひを、引ひ

手繰るやうにぐいと取つた。

「まあ。」

「ばけものゝする事だと思つて下さい、丑満時で、刻限が刻限だから。」

ほゞ其の人がらも分つたので、遠慮なしに、半調戯ふやうに、手どころか、する／＼と面を拭いた。

湯のぬくもりがまだ残る、木綿も女の膚馴れて、柔かに滑かである。

「あれ、お氣味が悪うございませうのに。」

と釣込まれたやうに、片袖を頬に當てゝ、取戻さうと差出す手から、ついと、あとじさりに離れた客は、手拭を人質の如く、しかと取つて、

「氣味の悪かつたのは只今でしたな。――此の夜ふけに、しかも、此處から、唐突だらう。」

其のまゝ洗面所へ肩を入れて、

「思ひも寄らない。――それに、餘り美しい綺麗な人なんだから。」

聲が天井へもつき通して、廊下へも響くやうに思はれたので、急に、ひっそりと聲の調子を沈めた。

「ほんとうに膽が潰れたね。今思つてもぞつとする……別嬪なのと、不意討で……」

「お巧言ばつかり。」

と、少し身を寄せたが、さしうつつむく。

「串戯ぢやありません。．．．．．」お手

水．．．．．の時の如きは、頭から覇を浴びて

湯の底へ引込まれるかと思つたのさ。」

大袈裟には聞えたが。．．．．．

「何とも申譯がありません。．．．．．時ならない

時分に、髪を結つたりなんかしましたものだから。

「あの、實は、今しがた、遠方のお客様から

電報が入りまして、此の三時十分に動橋へ着きます

汽車で、當方へおいでに成るツて事だものだから、

あとは皆年下の女たちが疲れて寐て居ますし．．．

．．．私がお世話を申上げますので。あの、久しぶり

で宵に髪を洗ひましたものですから、一寸束ねて居

りました處なんでございますよ。」

いまは櫛巻が艶々しく、すなほな髪のおつさりし

たのに、顔がやつれてさへ見えるほどである。

「女中部屋でいたせばようございますのに、床も

枕も一杯に成つて寝て居るものでございますから、

つい、一風呂頂きましたあとを、お客様のお使いに
成ります處を拝借をいたしまして、よる夜中だと申
すのに。・・・變化でございますわね　――

眞個に。」

と鬢に手を觸つたまゝ又俯向く。

「何、温泉宿の夜中に、寂しい廊下で出會すのは、
そんなお化に限るんだけど、何てたつて驚きまし
たよ　――馬鹿々々しいほど驚いたぜ。」

言ふまでもなく、女中と分つて、ものいひぶりも
遠慮なしに、

「いまだに、胸がどき／＼するね。」
と、何うした料簡だか、ありあはせた籐椅子に、
ぐつたりとなつて肱をもたせる。

「あなた、お寒くはございませんの。」

「今度は赫々とほてるんだがね。　――腰が抜
けて立てません。」

「まあ・・・」

「お澄さん……私は見事に強請つたね。
 ー 強請つたより強請だよ。いや、此の時刻だ
 から強盗の所業です。しかし難有い。」
 と、枕だけ刎ねた寢床の前で、盆の上ながら其女
 中 ー お澄 ー に酌をして貰つて、怪しか
 らず恐悦して居る。

客は、手を曳いてくれないでは、腰が抜けて二階
 へは上れないと、串戯を眞顔で強ひると、ー
 一寸微笑みながら、それでも心から氣の毒さうに、
 否とも言はず、肩を並べて、階子段を ー 上る
 と蜿りしなの寂しい白い燈に、顔がまた白く、棲が
 青かつた。客は、機會のこんな事は人間一生の旅
 のうちに、幾度もあるものではない。辻堂の中で三々
 九度の杯をするやうに一杯飲まう、と言つた。 ー
 酒は、宵の、膳の三本めの銚子が、給仕は遁げた
 し、一人では詰らないから、寢しなに呷らうと思つ
 て、それにも及ばず、ぐつすり寐込んだのが、其の
 まゝ袋戸棚の上に忍ばしてある事を思ひ出した

し、．．．．．又然うも言つた。　　―　　お澄が念のため時間を訊いた時、懐中時計は二時半に少し間があつた。

「では、　　―　　一寸、．．．．．掃除番の目ざとい爺やが一人起きましたから、それに言つて、心得さす事がありますから。」　　と軽く柔にすり抜けて、扉の口から引返す。．．．．．客に接しては、草履を穿かない素足は、水のやうに、段の中途でもう消える。．．．．．宵に鯨を釣落した苦き経験のある男が、今度は鱸を水際で遁した。恰も其の影を追ふ如く、障子を開けて硝子戸越に湖を覗いた。

連り互る山々の薄墨の影の消えさうなのが、霧の中に縁を繞らす、湖は、一面の大なる銀盤である。その白銀を磨いた布目ばかりの汲もない。目の下の汀なる枯蘆に、縦横に霜を置いたのが、天心の月に咲いた青い珊瑚珠のやうに見えて、其の中から、瑠璃の椀に似て、長く水面を遙に渡るのは別館の長廊下で、棟に欄干を繞した月の色と、露の光をうけるための臺のやうな建ものが、中空にも立てば、水に

も映る。其處に鎖した雨戸々が透通つて、淡く黄を帯びたのは人なき燈のもれるのであらう。

鐘の音も聞えない。

瀉、此の湖の幅の最も廣く、山の形の最も遠いあたりには、唯一つ黒い點が浮いて見える。船か雁か、
二三か、ふと其が月影に浮ぶお澄の、眉の下の黒子に似て居た。

冷える、冷い・・・女に遁げられた男はすぐに一すくみに寒く成つた。一人で、蟻が冬籠に貯へたやうな件の其の一銚子。――誰に習つて何時覺えた遺繰りだか、小皿の小鳥に紙を蔽うて、煽つて散らないやうに杉箸をおもしに置いたのを取り出して、自棄に茶碗で呷つた處へ――あの、聲音は――お澄が來た。「何もございませぬけれど、」と、いや、それ處か、瓜の奈良漬。「山家ですね。」と胡桃の砂糖煮。臺十能に火を持つて來たのを、此處の火鉢と、もう一つ。・・・段の上り口の傍に、水屋のやうな三疊があつて、瓶掛、茶道

具ぐの類るゐが置おいてある。其處そこの火鉢ひばちとへ、取分とりわけた。それから鄰座敷となりざしきへ運はこぶのださうで、床とこの間の壁裏かへうらが、其その鄰座敷となりざしき。――「旦那様だんなさまの前まへですけど、この二室ふたまが取とつて置おきの上等じやうじやう」で、電報でんぱうの客きやくと言いふのが、追おつて其處そこへ通とほるのださうである。――

「まあお一杯ひとつ。……お銚子てうしが冷さめますから、こゝでお爛かんを。ぶしつけですけれど、途中とちゆうが遠とほうございますから、おかはりの分ぶんも、」と銚子てうしを二本ほん行届ゆきといた小取ことりまはしで、大おほびけすぎの小酒こざかもり。北きたの海うみなる海鳴うみなりの鐘かねに似にて凍こほる時とき、音おとに聞きく……。安宅あたかの關せきは、此この邊あたりから海上かいじやう三里り、辨慶べんけいが何どうしたと？ 石川縣いしかはけん能美郡のみこほり片山津かたやまつの、直侍なほさむらひとは、こんなものかと、客きやくは廣袖どてらの襟えりを撫なで、胡坐あぐらで納をさまつたものであつた。

「だけど……。お澄すみさんあと最もう十五分ふんか、二十分ふんで鄰座敷となりざしきへ行いつて了しまはれるんだと思おもふと、情なさけない氣きがするね。」

「いゝえ。――まあ、お重かさねなさいまし、す

ぐに又まゐります。」

「何、彼方で放すものかね。――電報一本で、

遠くから魔術のやうに、旅館の大戸をがら／＼と開けさせて、お澄さんに、夜中に湯をつかはせて、髪を結はせて、薄化粧で待たせるほどの大したお客なんだもの。」

「まあ、……だつて貴方、さばき髪でお迎へは出来ないではございませんか。――それに、

手順で私が承りましたばかりですもの。何も私に用があつて入らつしやるのではありません。唯今は、丁度季節だものでございますから、此の瀉へ水鳥を撃ちに。」

「あゝ、銃獵に――鳴かい、鴨かい。」

「はあ、鳴も鴨も居ますんですが、おもに鶉をお撃ちに成ります。――此の間おいでに成りました時などは、お二人で鶉が、一百二三十も取れましてね、獵袋に一杯、七つも持つてお歸りに成りましたんですよ。此のまだ陽の上りません、霜のしら／＼あけが一番よく取れますつて、それで、いま時分お着に成ります。」

「何處から來るんだね、遠方ツて。」

「名古屋の方でございますの。おともの人と、犬が三頭、今夜も大方然うなんでございませうよ。こゝでお支度をなさる中に、馴れました船頭が参りますと、小船二艘でお出かけなさるんでございますわ。」

「それは・・・」

「それは大紳士だ。」と

客は歎息して怯えたやうに言った。

「えゝ、何ですか、貸座敷の御主人なんでございます。」

「貸座敷　　女部屋の亭主かい。おともは雑と幫間だな。」

「あ、當りました、旦那。」

と言つたが、軽く膝で手を拍つて、

「ほんに、辻占がよくつて、獵のお客様は喜びでございます。」

「お喜びかね。ふう成程　　あゝ大した勢ひ

だね。おゝ、此の静寂な霜の湖を船で亂して、罨が

白山へドーンと響くと、寝ぬくまつた目を覺して、

蘆の間から美しい紅玉の陽の影を、黒水晶のやうな

羽に鎮めようとする鶺鴒が、一羽ばかりと落ちるんだ。

血が、ぼた／＼と流れよう。犬の口へぐたりとはま

つて、水しぶきの中を、船へ倒れると、ニタ／＼と

笑わらふ貸かし座ざ敷しきの亭てい主しゆの袋ふくろへ納をさまるんだな。」

お澄すみは白しろい指ゆびを扱しごきつゝ、うっかり聞きいて顔かほを見みた。

「——お澄すみさん、私わたしは折をり入いつて姐ねえさんにお願ねがひが一つある。」

客きやくは膝ひざをきめて居ゐ直なほつたのである。

四

渠は稲田雪次郎と言ふ。――宿帳の上を更めて名を言った。畫家である。いくたびも生死の境にさまよひながら、今年初めて……東京上野の展覽會。――「姐さんは知つて居るか。」「え、此の邊でも評判でございます。」「――其の上野の美術展覽會に入選した。」

構圖と言ふのが、湖畔の霜の鷓なのである。――

「鷓は一生を通じての私のために恩人なんです。」

生命の親とも思ふ恩人です。其の大神のある鷓の類が、夫も妻も娘も悴も、貸座敷の亭主と幫間の鐵砲を食つて、――時に、――百二三十づつ、袋へ七つも詰込まれるんでは遣切れない。――深更に無理を言つてお酌をして貰ふのさへ、間違つて居る處へ、こんな馬鹿な、無法な、沒常識な、お願ひと言つちやあないけれど、頼むから、後生だから、お澄さん、姐さんの力で、私が居る……此の朝だけ、其の鷓撃を留めさしては貰へないだらう

か。……男だてなら、あの木曾川の、で、留

めて見ると言つたつて、水の流は留められるもので
はない。が、女の力だ。あなたの情だ。――此
の潟の水が一時凍らないとも、火に成らないとも限
らない。其處が御婦人の力です。勿論まる切り、其
の人たちに留めさせる事の出来ない事は、解つて、
あきらめなければ成らないまでも、手筈を違へるな
り、故障を入れるなり、せめて時間でも遅れさし
て、鵜が明らかに夢からさめて、水鳥相當に、自衛
の守備の整ふやうにして、一羽でも、獲ものゝ方が
少く、鳥の助かる方が餘計にして貰ひたい。――
實は小松から此處に流れる棧川で以前――雪
間の白鷺を、船で射た友だちがあつて、・・・・
いまゝですらりと立つて遊んで居たのが、彈丸の響
と一所に姿が横に消えると、颯と血が流れたと言
ふ・・・・話を聞いた事があつて、それ一羽、私
には他人の鷺でさへ、お澄さんのやうな女が殺され
でもしたやうに悚然として震へ上つた。――然
るに鵜は恩人です。――姐さん、此はお酌を強
請つたやうな料簡ではありません。眞人間が、眞面
目に、師の前、兩親の前、神佛の前で頼むのおな
じ心で云ふんです。――私は孤兒だが、嘗て志

を得たら、東京へ迎へます。と言ふうちに、兩親はなくなりました。其の親たちの位牌を、……上野に展覽會の今最中、故郷の寺の位牌堂から移して来たのが、あの、大な革鞄の中に据ゑてあります。其の前で、謹んで言ふのです。――お位牌も、此の姐さんに、どうぞお力をお添へ下さい。」
と言つた。面が白臘のやうに色澄んで、伏目で聞いたお澄の、長い睫毛のまたゝくとゝもに、床に置いた大革鞄が、揺れて熊の動くやうに見えたのである。

「あら！私……」
この、もの淑なお澄が、慌しく言葉を投げて立つた、と思ふと、どか／＼どかと階子段を踏立てゝ、かゝる夜陰を憚らぬ、音が静寂間に湧上つた。

「奥方は寢床で、お待ちで。それで、お出迎へがないと言つた寸法でげせう。」
と下から上へ投掛けに肩へ浴びせたのは、旦那に續いた件の幫間と頷かれる。白い呼吸もほつほつと手に取るばかり、寒い聲だが、生ぬるいことを言ふ。

「や、お澄—— 此處か、座敷は。」

扉を開けた出會頭に、爺やが傍に、供が續いて突
立つた忘八の紳士が、我がために髪を結つて化粧し
たお澄の姿に、満悦らしい鼻聲を出した。が、氣疾
に頸からさきへ突込む目に、何と、閨の枕に小ざか
もり、媚薬を髣髴とさせた道具が並んで、生白けた
雪次郎が、しまの廣袖で、微酔で、夜具に凭れて居
たらうではないか。

正の肌身は其處で藻抜けて、こゝに空蝉の立つや
うなお澄は、呼吸も黒く成る、相撲取ほど肥つた紳
士の、臘虎襟の大外套の厚い煙に包まれた。

「いつもの上段の室でございますことよ。」と、
さすが客商賣の、透かさず機嫌を取つて、扉鄰へ導
くと、紳士の開閉の亂暴さは、ドンドンシン、續け
状に扉が鳴つた。

五

「旦那は ー は、あ、奥方様と成程。 . . .
 . . . それから御人浴と言ふ、先づ似ての御寸法。
 ー 其處でげす。 . . . いえ、馬鹿でも其
 くらゐな事は心得て居りますんで。 . . . 然し
 御口中ぐらゐになさいませんと、此から飛道具を扱
 ひます。いえ、第一遠く離れて在らつしやるで、奥
 方の方で御承知をなさいますまい。は、は、御遠
 慮なくお先へ。 . . . しかして其の上にゆつく
 りと。」

階子段に足踏して、
 「鶺鴒だよ、鶺鴒だよ、お次の鶺鴒だよ、晩の鶺鴒だよ、
 月の鶺鴒だよ、深夜の鶺鴒だよ、トンと打つけてトンノ
 ノトンとサ、おつとそいつは水難だ、水鶏だ、トン
 ノ、トン。」と下りて行く。

あとは、しばらく、鄰座敷に、火鉢があるまいと
 思ふほど寂寞した。が、お澄のしめやかな聲が、何
 となく雪次郎の胸に響いた。

「黙れ！」

と梁から天井へ、つゝぬけにドス聲で、

「分つた！ 然うか。三晩つゞけて、俺が鷓擊に行つて怪我をした夢を見たか。然うか、分つた。夢が何うした、そんな事は木片でもない。――俺か汝等の手で面へ溝泥を塗られたのは夢ぢやないぞ。此の赫と開けた大きな目を見ろい。――よくも汝、溝泥を塗りをつたな。――聞えるか、聞えるか。となりの野郎には聞えまいが、此のくらゐな大聲だ。われが耳は打ぬいたらう。どてツ腹へ響いたらう。」

「響いたが何うしたい。」と、雪次郎は鸚鵡がへしで、夜具に凭れて、兩の肩を聳やかした。そして身構へた。

が、其のまゝ何もなくバツタリ留んだ。――聞け、時に、ピシリ、ピシリ、ピシヤリと肉を鞭打つ音が響く。チン／＼チン／＼と、微に鐵瓶の湯が沸るやうな音が交る。が、それでないと、湯氣のけはひも、血汐が噴くやうで、凄じい。

雪次郎はハツと立つて、座敷の中を四五度廻つた。
――衝と露臺へ出る、此の片隅に二枚つゞきの
硝子を齒めた板戸があつて、青い幕が垂れて居る。
晩方の心覚えには、すぐ其の向うが、おなじ、こゝ
よりは廣い露臺で、座敷の障子が二三枚覗かれた
――と思ふ。……其のまゝ忍寄つて、密
と其の幕を引なぐりに絞ると、鄰室の障子には硝子
が嵌め込になつて居たので、一面に映るやうに透い
て見えた。あゝ、顔は見えないが、お澄の色は、
あの、姿見に映つた時とおなじであらう。眞うつむ
けに背ののめつた手が腕のつけもとまで、露呈に白
く拾上げられて、半身の光澤のある眞綿をたゞ、ふ
つくりと踵まで疊に裂いて、二條引伸ばしたやうに
されて居る。――ずり落ちた帯の結目を、みし
と踏んで、片膝を胴腹へむずと乗掛つて、忘八の紳
士が、外套も脱がず、革帯を陰氣に重く光らしたの
が、鐵の火箸で、ため打ちにピシヤリ打ちピシリと
當てる。八寸釘を、横に打つやうな此の拷掠に、ひ
つゝる肌はだに青い筋すぢの蛇うねるのさへ、紫色むらさきにのたうちつゝ
も、お澄は聲こゑも立てず、呼吸いきさせぬのである。

「えゝ！ づぶてえ阿魔だ。」

と、其鐵火箸を、今は突刺しさうに逆に取つた。

此の時、階段の下から跽音が來なかつたら、雪次郎は、硝子を破つて、血だらけに成つて飛込んだらう。

然までの苦痛を堪へたな。――あとでお澄の

片頬に、疊の目が鋸のやうについた。横顔で突ぶして齒をくひしばつたのである。そして、其のくひ込んだ疊の目に、あぶら汗にへばりついて、鬢のおくれ毛が彫込んだやうになつて居た。其の髪の一條を、雪次郎が引いてとつた時「あ痛、」と聲を上げたくらみであるから。――

慙くまでの苦痛を知らぬ顔で堪へた。――幫

間が歸つてからは、いまの拷掠については、何の氣色もしなかつたのである。

銃獵家のいひつけでお澄は茶漬の膳を調へに立つた。

扉から雪次郎が密と覗くと、中段の處で、肱を硬直に、帯の下の腰を塵抑へて、片手をぐつたりと壁に立つて、倒れさうにうつむいた姿を見た。が、氣

勢がしたか、ふいに眞青な顔して見ると、寂しい微笑を投げて、すつと下りたのである。

鄰室には、しばらく賤げに、淺ましい、賣女商賣の話が續いた。

「何をしてうせをる。――遅いなあ。」

二度まで爺やが出て来て、催促をされたあとで、お澄が膳を運んだらしい。

「何にもございません。――料理番が一寸休

みましたものですから。」

「奈良漬、結構。……お辨當も之が關でげすぜ、旦那。」

と、幫間が茶づけをすゝる音、さらさらさら。

スーと齒ぜゝりをしながら、

「天氣は極上、大獵でげすぜ、旦那。」

「首途に、くそ忌々しい事があるんだ。何うだか

なあ。さらけ留めて、一番新地で飲んだるかと思ふんだ。」

「貴方、一寸……お話がございます。」

「――辨當は帳場に出來て居るさうだが、船頭の來やうが、また遅かつた。」

「――へい、旦那御機嫌よう。」と三人ばかり座敷へ出ると、
「……遅いぢやねえか。」

と其の御横賺が大不機嫌。「先刻お勝手へ参り

ましたゞが、お澄さんが、まだ旦那方、御飯中で、

失禮だと言はつしやるもので。「――撃つ

ぞ。出る。此處から一發はなしたるか。」と銃獵

家が、怒りだちに立つた時は、もう横雲がたなびい

て、湖の面がほんのりと青ずんだ。月は水線に玉を

沈めて、雪の晴れた白山に、薄紫の霧が、つたの

である。

早いもので、湖に、小さい黒い點が二つばかり、霧を曳いて動いた。船である。

睡眠は覺めたらう。翼を鳴らせ、朝霜に、光あれ、

ちから
力あれ、壽かれ、鵜よ。

ゆきじろう
雪次郎は、しかし、青い顔して、露臺に湖に面して、肩をしめて立つて居た。

すみ はじ
お澄が入つて来た。――が、すぐに顔が見られなかつた。首筋の骨が硬ばつたのである。

あなた ちよつと
「貴方、一寸……お話がございます。」

すみ しつか
お澄が静に然う言ふと、から／＼と釣を手繰つて、露臺の稍子戸に、青い幕を深く蔽うた。

ねや しやうじ
閨の障子はまだ暗い。

なん まを
「何とも申しやうがない。」

ゆき じ
雪はニとなつて手を支いた。

わたし ばんげ
「私は懺悔をする、皆嘘だ。――畫工は畫工

うへの
で、上野の美術展覽會に出しは出したが、まつたくの處は落第したんだ。自棄まぎれに飛出したんで、

りやうしん かんたう
両親には勘當はされても、位牌に面目のあるやうな男ぢやない。――其の大革靴も借ものです。攀

わい たて
ニの盾だと言つて、貸した友だちは笑つたが、しかし、破りも裂きも出来ないの、其のなかにたゝき込んである、鵜を畫いたのは事實です。女郎屋の亭

主が名古屋くんだりから、電報で、片山津の戸を眞夜中にあけさせた上に、お澄さんほどの女に、髪を結はせ、化粧をさせて、給仕につかせて、供をつれて船を漕がせて、湖の鵜を狙撃に撃つて廻る。犬が三頭　　―　三疋とも言はないで、姐さんが奴等の口うつしに言ふらしい、其三頭も癩に障つた。何にしろ、私の畫が突撥ねられたやうに口惜かつた。嫉妬だ、そねみだ、自棄なんです。　　―　私は鵜に成つたんだ。　　―　鵜が命乞ひに來た、と思つて堪へてくれ、お澄さん、堪忍してくれ給へ。いまは、勘定があるばかりだ、此處の勘定に心配はないが、そのほかは何にもない。　　―　無論、私が志得たら・・・」

「貴方。」

とお澄がきつぱり言つた。

「身を切られるより、貴方の前で、お恥かしい事です、親兄弟を養ひますために、私はとうから、あの旦那のお世話に成つて居りますんです。夫も棄て、身も棄て、死ぬほどの思ひをして、あなたのお言葉を貰きました。・・・あなたは此處をお立ちに成ると、もう其の時から、私なぞは、山の鳥

です、野の薊あざみです。路傍みちばたの塵ちりなんです。見返りみかへもな
さいますまい。――いゝえ、いゝえ、いゝえ、いゝえ、
それを承知しやうちで、………覺悟かくこの上うへでしました事ことで
す。私は女をんなが一生しやうじゆうに一度ひとと思ふ事おもをしました。貴方あなた、
私わたしに御褒美ごほうびを下くださいまし。」

「其その、其その、其その事ことだよ………實じつは。」

「いゝえ、ほかのものは要いりません。唯たゞ一品ひとしな。」

「唯たゞ一品ひとしな。」

「貴方あなたの小指こゆびを切きつて下ください。」

「澄すみに、小指こゆびを下くださいまし。」 少すくなからず不良性ふりやうせい

を帶おびたらしいまでの若者わかものが、わな／＼と震ふるへなが
ら、

「親おやが、兩親ふたおやがあるんだよ。」

「私わたしにもございますわ。」

と凜りんと言いつた。

拳こぶしを握にぎつて、吃きつと見みて、

「お澄すみさん、剃刀かみそりを持もつて居あるか。」

「はい。」

「いや、――食切くひきつてくれ、其その皓齒しうはで……

……潔けつくあなたに上げます。」

吸^すふやうな思^{おも}ひがしたが、あとの疼^{いた}痛^{たみ}は鋭^{すろと}かつた。
吸^すふやうな思^{おも}ひがしたが、あとの疼^{いた}痛^{たみ}は鋭^{すろと}かつた。
渠^{かれ}は大^{おほ}夜^や具^ぐを頭^{あたま}から引^{ひっ}被^{かぶ}つた。

「看病^{かんびやう}をいたしますよ。」
お澄^{すみ}は、胸^{むね}白^{しろ}く、下^{した}じめの他^{ほか}に血^ちが浸^{にじ}む。 . . .
・ 繻^{しゆ}子^すの帯^{おび}がする／＼と鳴^なつた。

【完】